

八大教育主張講演会にみる及川平治の「実際家」としての自負

木村, 栞太
九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻（教育経営学）：修士課程

<http://hdl.handle.net/2324/1906398>

出版情報：教育基礎学研究. 13, pp.107-115, 2016-03-28. 九州大学大学院人間環境学府教育哲学・教育社会史研究室
バージョン：
権利関係：



八大教育主張講演会にみる及川平治の 「実際家」としての自負

木村 栞 太

はじめに

本稿の課題は、及川平治（1875～1939年、以下及川と記す）が八大教育主張講演会（以下、講演会と記す）において、聴衆である新しい教授法などに関心をもった教師たちに何を語り、何を伝えようとしたのかという点に着目することで、講演会が教育史的にどのような意味を持ちうるものであったのかを考察することにある。

及川は、1875（明治8）年に、宮城県旧栗原郡にて農家の次男坊としてこの世に生まれた。代用教員として若くから教えることをその生業とした及川は、その指導力を買われ尋常高等小学校の校長に抜擢される。しかし、及川はそうした経緯があったにもかかわらず、27歳のころにはその職を辞し、高等文官試験に合格することを目標にすえ、上京するのである。高級官僚への道は、その道を半ばにして断念することになるが、旧制度における最大の資格試験のひとつであった文部省教員検定試験（以下、文検と記す）「教育科」への合格を果たしたことは、及川を象徴する経歴であり、その上昇志向は彼の人生観を捉えるうえで留意されなければならない¹。

そのような及川が講演会に登壇したのは、2万5000部もの売り上げを誇った主著『分団式動的教育法』（1912（大正元）年。以下、『動的』と記す）および、それに続く形で刊行された『分団式各科動的教育法』（1915年。以下、『各科動的』と記す）を記した後のことである。また、この時期は、及川が動的教育法の実践家として世にその名を知らしめつつある時期でもあった。

東京で文検に合格した及川が、かの明石女子師範学校（以下、明石附小と記す）の教諭兼附属小学校主事となるのは、1907（明治38）年のことである。明石附小に赴任した及川は、ここでの教育実践に取り組むなかで、『動的』や『各科動的』を執筆し、更なる教授法の境地を模索し、その学びを深めていった。

本稿が、当時の教育界において少なからぬ影響力を有した及川を対象とすることで、講演会の教育史的な意味について迫ってゆこうとするものであることは冒頭に示したとおりである。以下では、まず講演会がどのような経緯から企画・運営されたのかという点を整理することとする。次に、及川の来歴を追うなかで、及川の教育論がどのようにして形成されてゆくのか、及川の人生観に着目しながら考察することとする。最後に、これまでの議論で整理した視点から及川の講演会での語りとその様式に注目し、及川が

聴衆に何を伝えようとし、また何が伝わったと考えられるのかを考察することで、講演会の教育史的意味について迫ってゆくこととする。

1. 八大教育主張講演会の目的と位置づけ

八大教育主張講演会は、1921（大正10）年8月1日から8日まで、東京高等師範学校の講堂にて、大日本学術協会主催のもとに行われた講演会であり、大正新教育運動を象徴する出来事のひとつである。講演会は、大日本学術協会が発刊する雑誌『教育学術界』の主幹であった^{とどむ}尼子止の発案のもと準備がすすめられた。尼子は、講演会の「閉会の辞」においてその趣旨を下記のように語っている。

さて、今回の企ては兎に角私の吾教育界に対する学術的向上の一方法として行った事で、冠するに革命的の語を以てして名づくるに教育学術研究大会としましたことは、茲に私の説明を要せず已に二千有百の諸君の十分にご判断になっていることと思えます²。

また、講習会の開催時期は、現職教員研修の主流であった夏期講習が通例行われた時期と期を一にするものであった。橋本（2015）は、こうした講演会の開催時期に関しても、当時の講演会の社会的特性を示すものとして指摘している。講演会が高い評価を得、盛會を博したことの背景要因として、橋本（2015）が指摘したのは以下の2点である。①文部省が強力な管理と指導のもと講習会の官製化を押し進めており、「教員は参加することが当然であるかのように、半強制的に参加を求め」られたこと、②夏期「講習を主催した地方教育会は、元来行政当局の保護と指導の下で成立発展してきたものであったが、大正期に入ると行政と癒着した教育界の体質が、各地で批判されるように」なっていたこと（p.60）。以上の背景要因より橋本（2015）は、「この研究大会が既存の講習会を痛烈に批判し、それを改革する目的で開催されたものであ」ったと指摘している（p.59）。

これまでに講演会の歴史的意義を考察した論者としては主に中野と橋本が挙げられる。中野（2008）は、講演会が教育研究運動史上、刺激剤として意義をもったことに言及し、その歴史的意義について語っている³。一方、橋本（2015）は、中野の観点からその視座を広げることでその歴史的意義にふれ、それは「教師が自らの立場と責任に向き合い、「実践」のなかから、教職の本質を見出そうとする姿、すなわち「教職の覚醒」にあり、自らの使命感から進んで自己研修して成長することの「歓び」を自覚した」（p.62）と指摘するのである。

これまでの講演会に関する分析は、講演会そのものを対象としたものであったと整理することができるだろう。それは、講演会それ自体を歴史的な文脈から捉える視座とし

て有効なものであった。しかしながら、橋本が「さらにこの大会の意義を追及するためには、そこで議論された八大教育主張の思想史的な意義や、それが教師の実践思想の形成や実践改革に及ぼした影響について検討を進める必要がある」⁴と指摘しているように、先行研究において用いられてきた分析視座では、そこに登壇した演者たちが果たした役割などが捨象されていることが問題点のひとつとして残されたままであった。

小論では以上の問題意識から、講演会に登壇した演者の語りに着目することで、その歴史的解釈に新たな意味の付与を試みる。そして、ここでは講演会の一人目の登壇者であり、研究対象としての蓄積もある及川平治を分析対象として措定し、その主張や語り方を分析してゆくこととする。

2. 及川の来歴にみる向学心と野心

及川の出自については、先に述べたように農家の生まれであった。他界する3年前に仙台市の教育研究所の局長にまで上り詰めたことを振り返れば、その人生は立身出世を絵に描いたようなものであったと評することができる。しかしながら、当の及川自身の心中に焦点を当ててみると、そうした評価は大きく異なったものへと様変わりする。

及川が母校の附属小学校の訓導として勤務をするなかで、単級学級の授業経営を工夫して「全県単級学級の模範」として荣誉に輝いたことが評価され、尋常高等小学校の校長に抜擢されたことは、及川の人生において大きな転機となったことは間違いないだろうが、及川の人生観を考察するうえで特筆されるべきは、彼が27歳にしてその職を辞し、東京への遊学を選択したことであるだろう。及川が東京への遊学を決断したのは、他でもない高等文官試験に合格するためであった。高等文官への夢は、自身が病床に伏してしまったために、道半ばとなってしまふものの、病床に伏しながらも療養のかたわら教育学の原書に親しみ、教育雑誌への寄稿などを精力的に行っていたとされる⁵。そして、次なる目標として文検を設定すると、東京遊学を行った3年後には見事「教育科」での合格を勝ち取ってしまうのである。そこには及川の並々ならぬ志の高さが垣間見えるのだ。

文検に合格して2年後である1907（明治40）年9月、32歳となった及川は、明石附小の主事として就任する。就任後も及川の向学心は衰えるところがなく、1912年には『分団』、1915年には『各科分団』を執筆し大いに注目を集めた。この頃には、新教育の中心的な存在としての地位を固めつつあった。1925（大正14）年には、「普通教育状況の視察」という目的のもと、欧米への出張を果たした。アメリカでは、コロンビア大学ティーチャーズカレッジのサマーセッションに参加、欧州では100を超える学校の視察をとおして、後の研究テーマである生活単元論の構想を膨らませたようである⁶。

以上のような及川の経歴は、非常に活動的なものであり、及川が、社会的に果たした役割も大きかったことがうかがわれる。橋本（2012）は、こうした及川の人生を振り返

ることで、及川のもつ野心について言及している。以下は、橋本（2012）が捉える及川の野心についての言及である。

東北の農村に生まれ、早くに父を亡くして小学校教師として働かざるを得なかった及川は、師範学校卒という自分の学歴にコンプレックスを抱いており、人一倍努力して高学歴の者に負けまいとする野心家であった。学歴は低くとも試験に合格して高級官僚になろうとした夢は病気のために断念せざるを得なかったが、教育の世界で立身出世を果たすために文部省師範学校中学校女学校教員検定、いわゆる「文検」を受験する。（中略）及川は、自らの学歴にコンプレックスを持ちながらもそれをバネにしつつ、小学校教育の現場から実践課題の解決のために研究に「凡てを捨て、」取り組むこととなった。

3. 及川の講演会での語り

前節では及川の来歴を辿りながら、及川が自身の学歴に対して少なからぬコンプレックスを抱きながら、立身出世を志し勉学に励んできた背景をもつ人物であったことがわかった。そこで、ここからは、講演会での及川の語りに着目しながら、そうした人生観をもった及川の語りにはどのような特徴が見いだされるのだろうかという点について講演会の記録をたどってゆくこととする。まずは、その語りの構成に着目するなかで、及川の語りの大枠を捉える。下記は、『八大教育主張』における章構成である。

- 一 序言
- 二 静的教育と動的教育との比較
- 三 学習の定義
 - 一 地位論 二 機能論 三 題材論(自学論)
- 四 教材、課程、教科書論
- 五 教育の目的方法の定義

図1 及川の講演内容

小原國芳ほか（1976）『八大教育主張』より筆者作成

図1の講演内容からは、「定義」や各論の名前などが連なっていることが分かり、及川が動的教育論において核となる概念について、その意味内容の紹介を主に行おうとしたことがうかがわれる。講演会が開催されたのは、1921年8月のことであり、及川は、当時すでに『動的』及び『各科動的』を著していた。講演会で語られた内容もやはり、この主著2冊における論考が講釈されたと考えるのが妥当であり、『動的』及び『各科動的』の章立てを主な手掛かりとしてみると、教科間での個別具体的な議論を取り除いた『動

的』、『各科動的』における理念的な論考が取り扱われていることがわかる。

次に具体的な内容に焦点を当てて分析を試みる。及川は自身の教育論を論じるにあたって、その「動的」という概念について「静的」との対比の中で大まかな比較を行うことからその語りを開始している。「静的教育と動的教育との比較」における冒頭は下記のように始まる。

第一的静的教育と動的教育との比較をします。今ここに子供が蜻蛉を見た。「ああ取りたいなあ」と云ふ慾が起こつた。そこで過去の経験から割り出して手で掴まうとする。「やあ逃げた。失策つた」とこれから帽子を持つて行つて被せた。

以上のように、及川は、その語りにおいてできる限り具体的な例示を紹介することに重きを置いていることが看取される。蜻蛉の事例の他にも講演会では、「単衣の仕立て方」や「乗算九九の教え方」、「居敷当の教え方」など具体的な事例を用いながら動的教育論における概念の解説を試みている。こうした語りに関する特徴は、動的教育論において用いられる概念の複雑さを少しでも緩和することで、聴衆の理解を促そうとする及川の意図を示すものであるだろう。

八大教育主張は及川にとって、コンプレックスの対象である学者に対して、全国の教員の前で自身の研究活動のすばらしさをお披露目する格好の機会であったと考えることができるのではなかろうか。そうした場において、及川が論じたのは、机上の空論に陥ることのない、具体論であり、及川の言葉を借りるならば「実際論」であったのだ。

4. 語り方にみる及川の自負と実際論

講演会において及川が実際論を語ったということに、その特性を見出すことができる点は先に述べた通りである。その内容は、様々な例えに基づいた具体的な教授法の説明であり、そうした教授がどのような機能のもとに成立しているのかを説明するものであった。及川は講演を通して実際論を何度も強調する。そうした語り方の背景にあるものについてここでは追ってゆくことにしたい。

講演会の準備は、辛辣な筆致で知られる尼子止が革命的と冠しうるような大会の開催を企図するなかで進められた。討論の場を擁した本講演会は、当時では独特な色調を有した大会であったとされる。加えて、司会として参加することになっていたのは、東京高等師範学校教授、文学博士の大瀬甚太郎や女子高等師範学校兼東京師範学校教授であり、同じく文学博士の吉田熊次を筆頭とする著名人であった⁸。以上のように、講演会に登壇する演者にとって、自身の活動や教育論に対するそれ相応の自負が求められるような構造を講演会が有していたことは、演者の語り方を考察するうえで留意しておかねばならない講演会の特質であるだろう。では、及川がそうした講演会において先の講演内

容をいかようにして語ったのか、いくつかの引用を用いて考察してみる。以下は、講演の冒頭である序言での及川の語りである。

私がこの動的教育論を研究してより既に十五年になるのであります。一番初めに分団式動的教育法の著述をしてから既に十年になるのであります。でありますから「いろは」の「い」の字の教え方を如何にすべきか、「一に一を足せば二になる」ことを如何にして授くべきかと云ふ細微のことまで動学観上より研究しているのであります。併し乍らこんにちはさう云ふことを申し上げるのではありません。

及川はこれから話す教育論に対する自らの自信を聴衆に知らしめると同時に「私としては十五年前に主張したこの教育法が今日新思潮として議論せらることを喜ぶと同時に悲しむのであります」と続けることで、今日の教育現場に対する批判的な姿勢を示している。及川が『動的』及び『各科動的』を著したころより、動的教育の重要性を主張してきた及川にとって、当時の教授法改革に関する機運の高まりは今更ながらのことであると、講演会に対する自身の位置づけを示したうえで、「空論を避けて実際論をやります」と講演内容が経験則に則っただけのものでも、理論ばかりの空論でもないことを強調するのである。また、講演の中ではこのように続けている。

如何なる新しい新教育学も哲学から直に離れるものではないのであります。哲学も必要でありますけれども教育の方法を建てるには生物学上からは斯く斯く、心理学上からは斯く斯く、論理学上からは斯く斯くと云ふことを明瞭に説明し得る人でなければ新教育学を主張する資格はないのであります。学者から教へて貰つた空論を徒に弄んだり、独断的に新説を唱へても役に立ちません。私は固より学者ではありません。機能的発生的心理学、機能的論理学、機能的社会学等さう云ふ学問を専攻して居るものではありません。けれども動的教育に関する部分は講演し得ると確信します。又動的教育に関係ある哲学も調べて居ります。実際これ迄各所に講演してきたつたのである。動的教育は生物学のみに基づいたもので哲学的背景がないと思ふような低級な聴講者は一人もいないと思ひますけれども一言しておきます。若しかかる学問の基礎なき新説は徒に古きを捨てて新しきにつく流行の教育学に終ることを信じて居るのであります。

講演内容のつなぎの段で、及川が語っているのは、動的教育論が経験則に頼り、また運よく時流に乗りおおせた新説に収束するようなものではなく、学問上の基盤を有した教授法であるということである。及川のいう実際論は、学問的な理論を否定するものではなく、それらを踏まえたと、その土壌の上に成り立っていなければならないもので

あった。そして、学問上の理解を凌駕する実際論としての位置づけを語ったのが、以下の一節である。

優等児、劣等児ありて能力不同と云ふは事実である。その事実に対嵌つた教育は正則の学級教育である。事実に対嵌らない教育は変則である。昔から学者は個性に注意すべしと云ふことを教えて居る。然し実際教え方が個性に不注意であった。余が十五年前から分団教育をせよと云ふことを主張したのは之がためである。

及川の主張によれば、学問的な理論だけでは目の前の子どもをどのように捉え、またどのように教えればよいのかという点、まさにその実際の状況に対応することができないというのである。

こうした及川の語りかけは、第三者によってどのように評価されたのであろうか。最後に、及川の講演に対する批評を引いておくこととする。

『八大教育主張』（小原國芳、1976年）の解説において論じられた沼野一男（玉川大学教授）の筆致は辛辣なものとなっている。沼野は、当時47歳であった及川のことを「よくいえば油の乗り切った時、悪くいえば自己の業績に対する反響や名声に少々自信過剰になりかけている時期」と冒頭において評し、「自己の教育論を展開する及川には、かなりの自負あるいは自恃があったろうことは、容易に想像される」と記している。及川に対する酷評の直接的な原因は、及川が講演の最後に「これから質問時間になりますが、下らん質問には答弁しません。自動車が待つてゐますから質問は簡単明瞭に願ひます」と締めくくったことにある。沼野は、動的教育論を引用することで皮肉ながらに、学習者たる聴衆に対する及川の発言の落ち度を指摘するのである。沼野の生きた時代においても「意味ある」と評された及川の実践が生き続けなかった要因の一つとして、及川の「人々の理解と協力を求める謙虚さと努力にかけていたことも付け加えなければならぬと思うのである」と締めくくっている⁹。

また、講演会の「きろくを書け」との依頼のもとに綴られた風塵子の回想録においても及川の描写が残っており、その内容は下記のとおりである。

愈々本日の講演者及川平治君が自慢の（？）八字髭を片ツ方だけピネリとひねりあげ登壇、コップの水を一杯グツと飲み乾し、ハンケチで口の回りから額の辺りを一応撫でまはし、さて咳一咳して二千の聴衆をグツと睨みつけて威勢を示した所は、流石当時の講演専門家だけあつてお入際の鮮やかさ一入りと感服仕つた¹⁰。

風塵子は、記録にあたって、「さてどんなに書いてよいのやら、まゝよ、暑い時の会だもの少しは吹き飛ばしたり、冷やかしたりするのも、扇風機のかほりになつてよいだらう」

と、その筆致にあたってはやや冗談めかした部分もあるようではある。風塵子や先の沼野の評価が客観的なものであるかといった点やその是非などについては筆を譲るとしても、講演会における及川の態度や様子に関する証左の一つとなるだろう。

以上、及川の講演会における語り方に着目し、その考察を行ってきたが、そこから浮き彫りとなるのは、コンプレックスであった学術の世界を乗り越え、「実際家」として大成を果たしたことを世に知らしめんとする及川の自負である。及川の語りは、理論と実践の往還を迫及する「実際家」としての語りであり、そうした「実際家」が大正新教育のエポックメイキングたる講演会において、登壇を果たしたという事実は、講演会を歴史的な文脈の中に位置づける際の一つの視点をもたらすのではないだろうか。

及川が講演会を通して、聴衆たる全国の教師に伝えようとしたのは、経験則のみに基づいた教育を行う実践家でもなく、また、机上の空論ばかりを唱えることで教育を語りうとする理論家や研究者でもない、ジンテーゼとして統合される「実際家」としての教育者の立ち位置の重要性であり、それは、及川がその人生観の中で醸成された学歴に対するコンプレックスがあいまって強化されるにいたったのである。

〔注〕

1. 橋本（2012）は、文検について「1885～1943年に施行された中等学校教員の国家試験であり、及川のように現職の訓導が受験する場合も多く、向上心旺盛な小学校教員の自己修養の場となっていた」と紹介している。
2. 風塵子（1921）「教育学術研究大会奇録」『教育学術界』教育学会編輯、第44巻、第1号、p.218。
3. 中野光（2008）『学校改革の史的原像——「大正自由教育」の系譜をたどって』黎明書房、p.131。
4. 橋本美保（2015）「八大教育主張講演会の教育史的意義」『東京学芸大学紀要、総合教育科学系』第66巻、第1号、p.62。
5. 添田晴雄（1989）「及川平治におけるデュイ教育学の需要と展開に関する研究序論」大阪市立大学大学院文学研究科『人文論叢』第17号、p.8。
6. 橋本（2009）によれば、そうした生活単元論の構想は、1930（昭和5）年には「生活単位」という言葉のもと概念として明確なものとなったとされる。
7. 『動的』の序論、第三章「動學觀と靜學觀」の冒頭で及川は、「本章「動學觀と靜學觀」。次章「動的教育學の組織」は初めて斯学を学ぶ方には稍難解であるかも知れぬ。」（p.14）と自論で用いる概念の必要性に言及しつつ、その複雑さについての前置きを置いている。
8. 前掲中野、p.130。
9. 沼野一男（1976）「及川平治『動的教育論』解説」小原國芳ほか編『八大教育主張』玉川大学出版部、pp.49-51。
10. 風塵子（1921）「教育学術研究大会奇録」『教育学術界』教育学会編輯、第44巻、第1号、pp.209-219。

参考文献

- 及川平治（1912）『分団式動的教育法』弘学館書店。
及川平治（1914）『分団式各科動的教育法』弘学館書店。

- 北村和夫（2009）「〈書評〉中野光著『学校改革の史的原像「大正自由教育」の系譜をたどって』『日本教師教育学会年報』第18巻、pp. 140-142。
- 添田晴雄（1989）「及川平治におけるデューイ教育学の需要と展開に関する研究序論」大阪市立大学大学院文学研究科『人文論叢』第17号、pp. 1～18。
- 中野光（2008）『学校改革の史的原像 — 「大正自由教育」の系譜をたどって』黎明書房。
- 橋本美保・田中智志（2015）『太守新教育の思想 — 生命の躍動』東信堂。
- 橋本美保・田中智志（2012）『プロジェクト活動 — 知と生を結ぶ学び』東京大学出版。
- 橋本美保（2012）「第3章 及川平治 — 教職の覚醒を引き起こした大正新教育運動の指導者」沖田行司編『人物で見る日本の教育』ミネルバ書房、pp. 205-212。
- 橋本美保（2015）「八大教育主張講演会の教育史的意義」『東京学芸大学紀要・総合教育科学系』第66巻、第1号、p. 55-66。
- 橋本美保（2009）「及川平治における生活单元論の形成 — 欧米新教育情報の影響を仲春に — 」『教育学研究』第76巻、第3号、pp. 309-321。
- 橋本美保（2005）「及川平治『分团式動的教育法』の系譜 — 近代日本におけるアメリカ・ヘルバルト主義の受容と新教育 — 」『教育学研究』第72巻、第2号、pp. 220-232。
- 風塵子（1921）「教育學術研究大会奇録」『教育學術界』教育学会編輯、第44巻、第1号、pp. 209-219。
- 小原國芳ほか編（1976）『八大教育主張』玉川大学出版部。
- 兵庫県明石女子師範学校編（1983）『回顧三十年』第一書房。
- 八大教育主張 — 玉川学園について — 玉川大学・玉川学園「小原國芳の理想の教育 — 「全人教育」が生まれた日」（最終アクセス日2016年2月7日 http://www.tamagawa.jp/introduction/enkaku/history/detail_5990.html)